

日常の外縁のゆらぎを誘発する建築

- 物の様相を空間に帯びさせる設計手法 -

観察とは対象への認識を反復することで対象をより深く理解する行為である。
 現代生活において、観察は減多に行われていないように思う。
 しかし他者を理解し自己の感覚が相対化される契機をもつ点で観察は非常に価値のある行為であると考ええる。
 観察とは非日常的の行為であるが、現代生活でも観察に近いことが行われている。
 それは観察という行為には満たない「日常の外縁のゆらぎ」である。
 日常を揺さぶり、その外縁に変化をもたらさうる感覚。
 観察への契機をもつこの感覚を、建築を通して刺激することはできないだろうか。

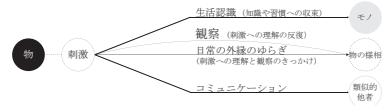
本研究では友人夫婦に依頼された小さな別荘（館山のハナレ）を試設計とし
 そこから本人夫婦が移住することを想定し住宅を設計する。

日常の外縁のゆらぎ ここでは私たちのまわりにありふれた物の集積を日常と定義する

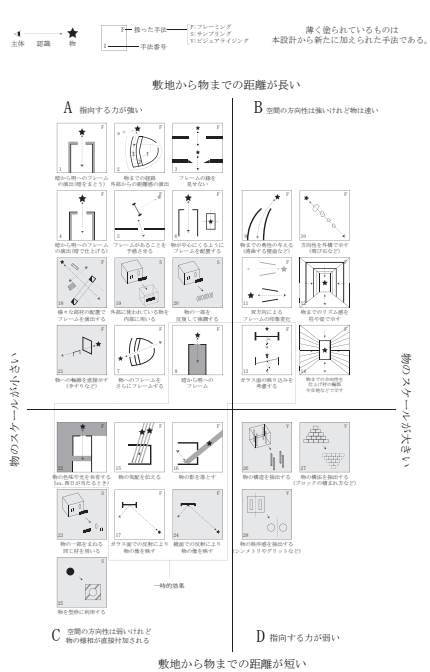


認識の枠組み

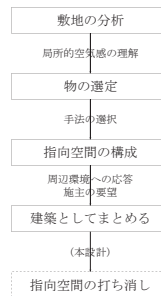
主体はある刺激を認識したとき、その刺激を三つの方法で処理する
 物への認識を変えることで、観察することを促すことができるのではないかと



指向空間の構成方法 物への認識を変える空間をここでは指向空間としている



設計の流れ



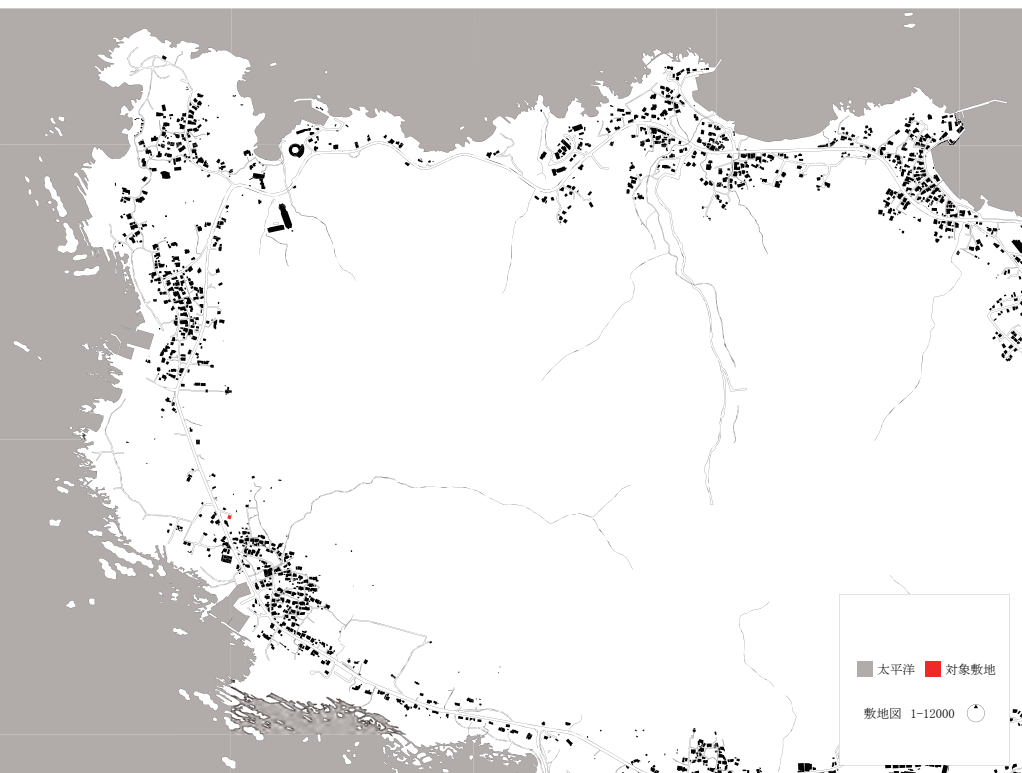
物の選定にあたって敷地の地形、気候、植生、生態、歴史、周辺環境などが複合的に主体に与える敷地の印象（敷地の局所的空気感）を理解する。
 敷地についても存在し、敷地の局所的空気感をもつ物、あるいはそれに関わる物を選定する。
 設計時に対象にした物とそれぞれの物に適用した手法と構成方法を表1にまとめる。

試設計では指向空間をつくる第一の手法としてフレーミングを提案する。
 フレームとフレーム周辺での、選定した物への視覚誘導と、
 物の様相そのものを共有することで、物を主体に強く認識させることをフレーミングと定義している。
 物の様相そのものの共有とは具体的に、外部にある物の影が室内に入り込む状況、
 また外部の物が特定の光に照らされているときに、同じ光が室内を照らしている状況など、
 主体が物の持つ性質（ここでは光や影）に覆われていることを物の様相を共有しているとする。

指向空間は様々なことができるが、その中で敷地の自然条件や隣地との関係、
 そして施主の要望に沿って指向空間を一つの建築としてまとめる。

選定した物の一覧

建築物	対象物	手法	構成方法	建築物	対象物	手法	構成方法
ハナレ	ソテツ	F	B	住宅	隣壁	V,S	D
	竹藪	F	C		RC住宅	F	D
	シンメトリカルな住宅	F	B		RC住宅 開口幅	S	C
	コンクリートブロック塀	F	A		RC住宅 スラブ高さ	S	C
住宅	ソテツ	F,S	B		RC住宅 仕上げ	S	C
	竹藪	F,S	C		木造住宅	F	B
	シンメトリカルな住宅	F,V	B		木造住宅 構造グリット	V	B
	コンクリートブロック塀	F,S	A		木造住宅 開口幅	V	A
	ハナレ	V	D		木造住宅 屋外手すり	S	A
	ダンチク	S	C		外壁のレンガ風タイル	S	A
	坂道(私道)	V	D		外壁の白タイル	S	A
	トタン屋根	V,S	C				

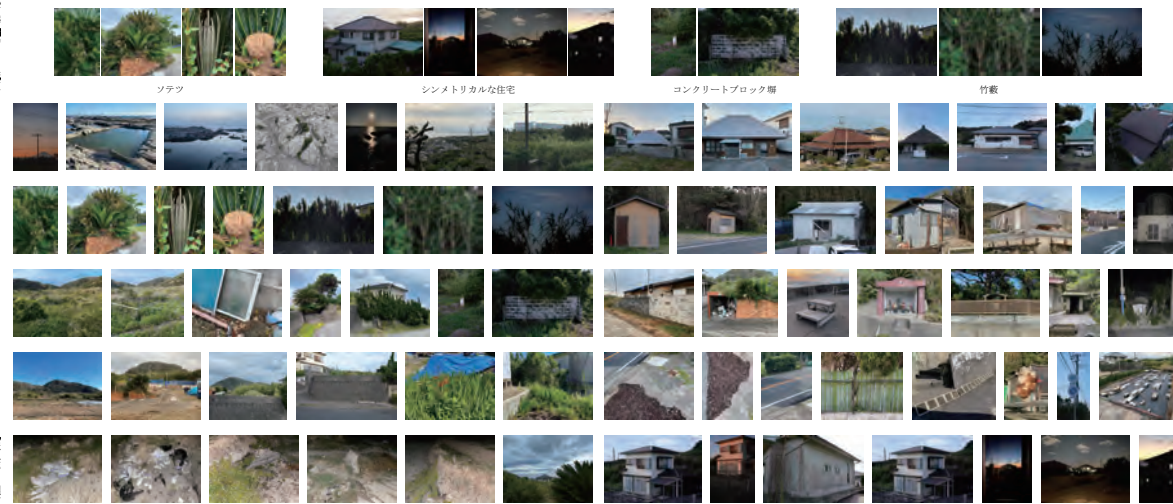


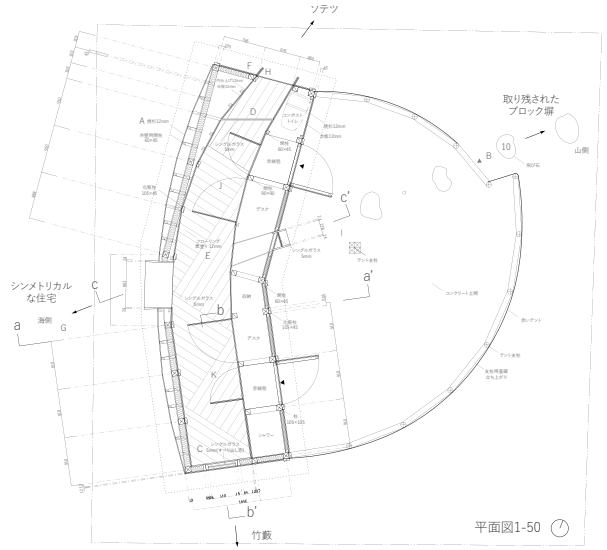
館山のハナレ - 試設計 -

千葉県館山市の南西部に位置する、閑散とした港町と別荘地との間にある、小さな集落の一角。
 空き家が多く、2019年の台風15号からの復興も半ばで、数年もの間、誰にも手入れされていなかった土地である。

敷地に何度も出向きそこにある様々な物への観察をつづけた。
 そこから試設計では四つの物を対象に建築をつくりあげることとした。
 ソテツ 敷地からシンメトリカルにみえる住宅 住宅の解体時に取り残されたブロック塀 竹藪

これらはいずれも敷地周辺の局所的空気感を纏っている。
 試設計のハナレは忙しい日常から距離をおき、自己を内省するような場が求められた。

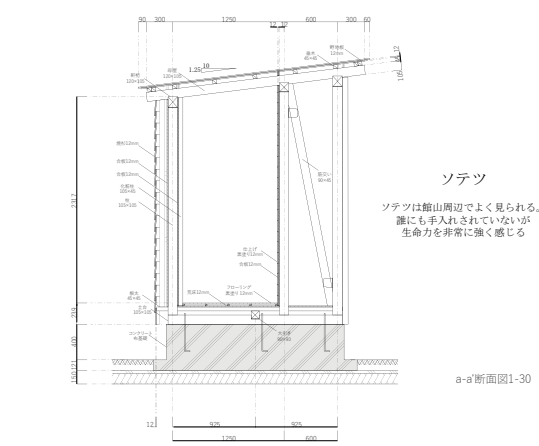
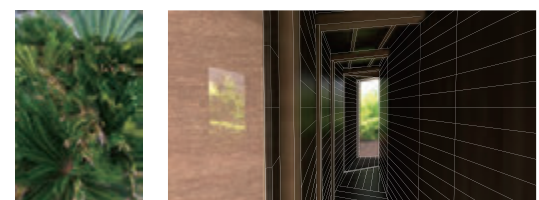




海が近いので、風の強い日でも外で過ごすように敷地西側にハナレを配置し風を受け流すように外壁をゆるく湾曲させた。

テントはここで過ごす期間のみ取り付ける仮設。外部から赤いテント、緑幕と赤い絨毯で囲われた入口、黒く塗られた室内へ動線を定めることで内外の心理的距離をもてるよう全ての要素を空間体験の一部として構成した。

抜った手法の番号
 $A=1 / B=2 / C=3 / D=3.13 / E=4.1214 / F=5 / G=5.711 / H=6 / I=7.11 / J=8.9.12.14 / K=8.9.12.14.15.16$

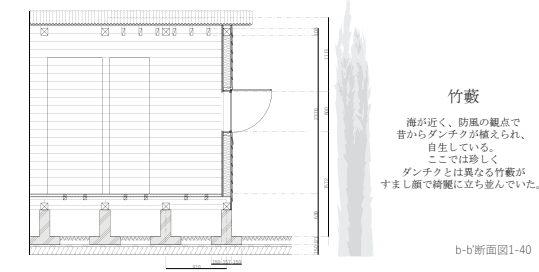
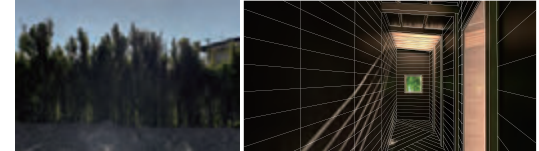


ソテツ
 ソテツは館山周辺でよく見られる。誰にも手入れされていないが生命力を非常に強く感じる

a-a'断面図1-30



西側(海側)



竹藪
 海が近く、防風の観点で昔からダンチクが植えられ、自生している。ここでは珍しくダンチクとは異なる竹藪がすまし顔で綺麗に立ち並んでいた。

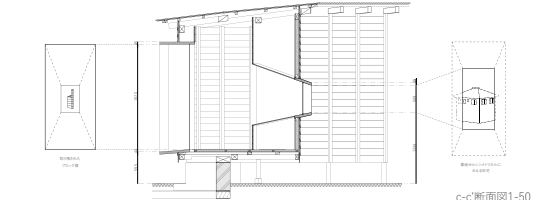
b-b'断面図1-40



東側(山側)



敷地からシンメトリカルにみえる住宅 住宅の解体時に取り残されたブロック塀
 敷地周辺で珍しい、比較的新しい住宅 敷地の裏にあった住宅は台風の影響を受け解体された。
 敷地から「よう」と呼ぶ 角度が離れている 敷地周囲の道に設置するようになり、置きざりにされたブロック塀
 雑然とした周囲から浮いて、不思議な存在感を放つ



c-c'断面図1-50

石を愛する家 - 本設計 -

館山のハナレの施主が定年後、施主の所有するハナレの目の前の敷地に東京から移住すると想定し、住宅を設計する。施主の要望はハナレではかなわなかった海見えるテラスとハナレの主室とは対照的な大きな主室である。ハナレで扱った物と敷地周辺からさらに物を選定し、指向空間を構成しながら、それらの指向空間を同時に打ち消していくことで設計を進めた。エントランスから海見えるテラスまで大きく回遊する動線で、様々にちりばめられた指向空間をまとめた。

館山のハナレから

館山のハナレでの設計手法を見直し再提案する。ハナレでは対象にした物への指向力が非常に強い。ハナレという日常的に使われない建物においては、その力が主体的にもたらす感覚に直結するため、指向する力の強い空間が有効であると考えた。しかし住宅など日常的に使われる建物では、主体が指向している対象に慣れすぎてしまうことから、少ない数の強い指向空間を求めると、数多くの弱い指向空間を設けることが有効であると考えた。そこで強すぎる指向空間を打ち消す操作に加え、指向する対象を増やし、さらに指向空間の種類を増やすためにフレーミングと並列して他の手法も取り入れることを提案する。

ダンテック

ダンテック

ダンテック

木造住宅
杉浦邸

水戸川

ソテツ

トタン屋根
瀬田八郎の物置小屋

既存築屋

石を愛する家

館山のハナレ

竹藪

水戸川

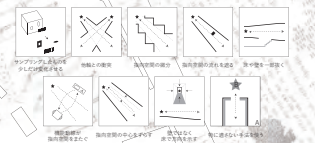
国道 287 号線
フラワーライン

サンプリング・ビジュアライジング

フレーミング取り込みの手法としてサンプリングとビジュアライジングを提案する。サンプリングとは目的の建物と空間に直接付加することである。その対象をそのまま取り込むこと。物そのものをサンプリングの枠の一部として利用することなどを行う。たとえばここでは木造住宅の手すりや様々な形を引用する。ビジュアライジングは目的の建物を加工し取り込むことである。物の構造や特徴を抽出し、その構成を明らかにしながら参照することなどが例として挙げられる。たとえばここでは木造住宅と住宅の構造体を抽出し、その両方を住宅に適用します。

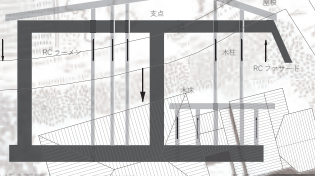
指向空間の打ち消し

指向空間を取り込みながら、指向空間を打ち消すことで、指向する方向を切り、空間を導き出し指向空間を失くす。

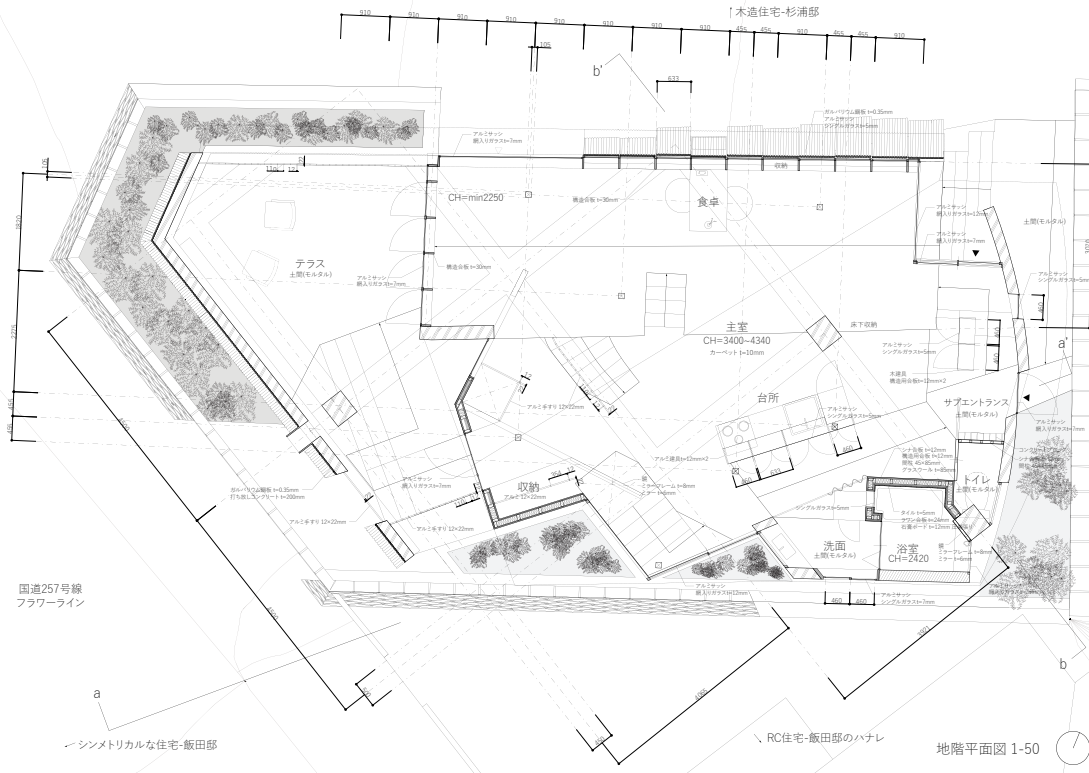
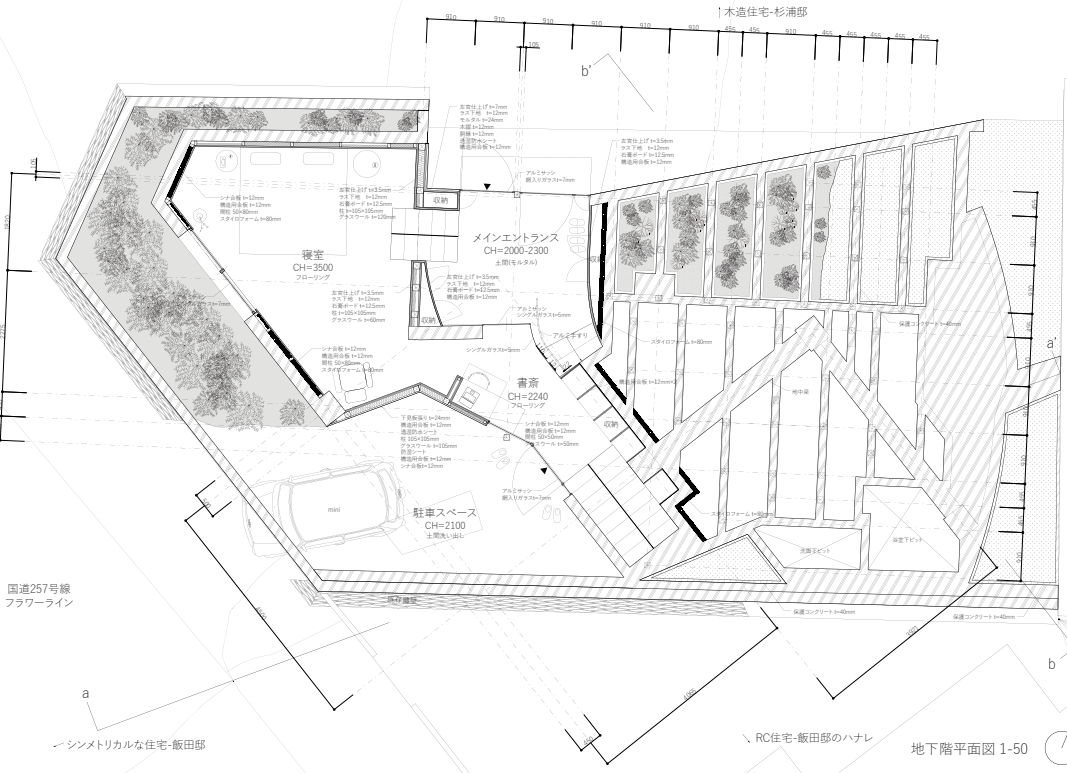


RCと木の混構造

木造住宅 - 杉浦邸とRC住宅 - 飯田さんのハナレからビジュアライジングした二つの構造体。RCラーメン構造が外構とファサードをもつ。木の45mmのグリッド構造が生活を変える床や壁をもつ。屋根はRCラーメンによって吊られたRCマサードと、柱間まで伸びる木の柱によってつり合いを保持変化する。



配置図 1:200



シメトリカルな住宅-飯田邸

RC住宅-飯田邸のハナレ

地下階平面図 1-50

シメトリカルな住宅-飯田邸

RC住宅-飯田邸のハナレ

地階平面図 1-50

